

●學資金と費ひ先

▲東京美術學校 此學校は參考書といふものは多くは要らない。他の學生が讀書して居る間に彼等は自我遊離の状態でカンパスに向つて繪筆を握りモデルに向つて塑土を練つて居る、是に費す金が中々少くない。一番少くないのが圖案科で洋畫科が最も多い。ザツと見積つてもカンパス、繪具を始め他の道具が月々五圓では足りぬ。少し勉強したり大作でも遣ると十圓位は要る、今一つはモデルだ、目下の標準が男の裸體で半日五十錢、女で四十錢、一日となると少し割引になる、着た儘と半身が半日二三十錢の所で學校の暇々にやるのだから何うしても半日宛一週間位を費す、連も一人では遣り切れぬので五六人共同で割當で拂ふやうにしてゐる。又中には夜間白馬會の研究所にも行く人がある、其處は入會金三圓、月謝二圓の定めだが夜間許りなら一圓足らずで濟むさうである。此外年二十圓の月謝に同二圓の校友會費を學校に納める、夫に下宿料を加へて月平均二十五圓乃至三十圓あれば澤山だ。此校の成績は一目して判るものだから誰に聞いても各自の競争と研究に追はれて連も遊んで居る暇はないと云つて居る、勿論多少の除外例はあるが、それから此校の生徒は二三年すると内職が出来る、其重なるものは繪葉書、依頼された肖像畫の報酬、雜誌のカット等で此収入が中々馬鹿にならぬ。圖案科の如きは學校に居る間から諸種の商店の顧問となつて月給を取つて其金を學資として居るものもある。此處

等は一寸他の學生と違つて居て面白い。但し内職の上手な男が果して不朽の作を出すか何うかは保證出来ぬ。(東京朝日新聞)

△ △ △

翌日は黙語、素空は、きのふの日野春、非崎のけしきわすれがたくて、引かへして寫生にゆく、おのれは舞鶴城趾を訪ひて、「舞鶴の城より見れば大空をかけるにばかりの富士の神山」これより武田信玄の墓に詣づ、

雲きりをおこしし龍のかげうせてみはか靜に松風のふく夕くれに宿にかへれば二人もほどなくかへり來て、景色こそきもおほえしか、何のとり食むものもなく、暑にさへ照らされれば、殆ど命も危かりき、畫かくことばかり人には樂々見えて苦しきはなしと、こぼし取出す數枚の實寫汗のしたゝりも見ゆるやうなり(藤園氏木曾日記の一節)

紹介

◎廣島尙古繪葉畫 號外第四

嚴島神社舞樂のコロタイ印刷にして、林歌、崑崙八仙、貴徳、新鞆鞆、胡蝶、納蘇利の六葉何れも鮮明にして、好古家ならぬも愛翫措く能はざるべし(一組廿錢、廣島市華屋町藤谷口〇堂)
◎洋風美術家小傳殘本あり、送料共金貳拾貳錢本會へ申込まれたし(春鳥會)